

秋期福音特別集会（3）（京都）

静動一如

――詩篇第46篇――

1976年10月31日

小池辰雄

ルターの讚美歌「我らの神は堅き城なり」 詩篇第46篇（私訳） 詩篇46篇の解説 避所なるキリストはわがうちに 預言書の終末的な希望 神の歴史（幕屋）の図 聖霊の河 祈り以上に聞かれている 常に天国を歩いている現実 孤軍万軍 世界はだんだん善くはならない 静動一如 カントの「善意志」 祈り

【詩篇46】

1 神はわれらの避所みけいしよまた力なり、なやめるときいとの最ちかき助なり。

2 さればたとい地はかわり

山はうみの中央もなかにうつるとも我儕われらはおそれじ。

3 よしその水はなりとどろきてさわぐとも、

その溢れきたるによりて山はゆるぐとも何かあらん。

4 河あり、そのながれは神のみやこをよろこばしめ

至上者いとたかきもののすみたもう聖所をよろこばしむ。

5 神そのなかにいませば都はうごかし、

神は朝つとにこれを助けたまわん。

6 もろもろの民はさわぎたち、もろもろの国はうごきたり。

神その声をいだしたまえば地はやがてとけぬ。

7 万軍のエホバはわれらとともになり。

ヤコブの神はわれらのたかき櫓やぐらなり。8 きたりてエホバの事跡みわざをみよ、エホバはおおくの懼おそるべきことを地になしたまえり。9 エホバは地のはてまでも戦闘たたかいをやめしめ弓をおりほこ戈をたち戦車いくさぐるまを火にてやきたもう。

10 汝等しずまりて我の神たるをしれ。

われはもろもろの国のうちに崇められ、

全地にあがめらるべし。



11 万軍のエホバはわれらと偕なり。
ヤコブの神はわれらの高きやぐらなり。

●ルターの讚美歌 「我らの神は堅き城なり」

詩篇第46篇は、申すまでもなく、マルチン・ルターが宗教改革の闘い^{とき}の聲として作った讚美歌。彼の讚美歌中の白眉のものです。その根拠となっているのがこの詩篇46篇です。

ルターの讚美歌の、

アイン フェステ ブルク イスト ウンザー ゴット
„Ein' feste Burg ist unser Gott.“ 「我らの神は堅き城なり」

というドイツ語の原作の第1節と2節を私は歌ってみます。

EIN' FESTE BURG IST UNSER GOTT 「我らの神は堅き城なり」 (私訳)

1. Ein' feste Burg ist unser Gott, 一、我らの神は堅き城なり

Ein' gute Wehr und Waffen, 攻防自在の武器なるぞ。

Er hilft uns frei aus aller Not, 今や我らは苦難^{なやみ}に遭えど、

Die uns jetzt hat betroffen. 神は一切の助けなり。

Der alt' böse Feind かの古昔^{いにしえ}よりの悪しき仇敵^{てき}

Mit Ernst er's jetzt meint; 今や真剣^{あらが}に抗い来たる。

Groß Macht und viel' List 大なる権力^{ちから}多くの謀略^{たくみ}は

Sein' grausam' Rüstung ist; その強悍^{おどろ}しき武器^{ぶき}にして

Auf Erd' ist nicht seins gleichen. 現世^{うつしよ}に彼の敵なし。

2. Mit unser Macht ist nichts getan, 二、我らの力^{ちから}をか為し得ん、

Wir sind gar bald verloren; 我ら忽ち^{たちま}失わるべし。

Es streit' für uns der rechte Mann, 我らのために戦^{ひと}つ義人あり、

Den Gott selbst hat erkoren. 神自らの撰^{えら}びの人ぞ。

Fragst du, wer der ist? たずぬるか、かは誰れと。

Er heißt Jesus Christ, その人はイエス・キリスト、

Der Herr Zebaoth, 万軍の主なる御神^みぞ。

Und ist kein andrer Gott; いかなるあだし神にも非ず。

Das Feld muß er behalten. 戦^{いくさ}の場はその聖手^{みて}にあり。

3. Und wenn die Welt voll Teufel wär, 三、縦^{たと}いこの世は悪魔に満ちて

Und wolt' uns gar verschlingen, 我らを全く^{また}呑みんとすとも

So fürchten wir uns nicht so sehr, 我らいたくは戦慄^{おの}かじ。



Es soll uns doch gelingen.
Der Fürst dieser Welt,
Wie saur' er sich stellt,
Tut er uns doch nicht;
Das macht : er ist gerichtet,
Ein Wörtlein kann ihn fällen.

勝利なお我らにぞある。
此の世の君主はいかばかり、
立腹に立ちはだかるも、
何ごとも我らになし得ず。
彼はすでに審判かれてあり。
聖言の一言、彼をば倒す。

4. Das Wort sie sollen lassen stahn
Und kein Dank dazu haben ;
Er ist bei uns wohl auf dem Plan
Mit seinem Geist und Gaben.
Nehmen sie den Leib,
Gut, Ehr, Kind und Weib :
Laß fahren dahin,
Sie haben's kein Gewinn,
Das Reich muß uns doch bleiben.

四、その徒輩聖言を空しうす、
これに一念の感謝あらなく。
聖子は戦の場にて我らに与す、
彼れの聖霊と恩恵もて
敵どもは取らば取れわが生命、
財も誉も子も妻も
すべてのものを奪い去れ！
彼ら何をか勝ち得んや。
神の国こそ我らには在れ。

非常に力強い内容です。この讚美歌はいつもルターは、サタンとの戦いときに彼はこれを自ら歌って力をつけていた。また、メランヒトンに

「さあ、歌おうじゃないか」

と言って、よく歌ったという話であります。この元になっているのが詩篇46篇です。

●詩篇第46篇（私訳）

詩篇46篇を今度は私自身の訳で読みます。

樂長に指揮をとらせコラの子らにアラモートウ（高音）調で歌わせた歌

1 神は我らの拠所また力、

なやみの時の強き助けぞ。

2 されば我らは怖れない、地は変り、

山々は海の最中に揺ぎ落つとも。

3 その大水 轟きて激らば激れ。

その漲りによりて、山々は震わば震え。

4 河ありてその諸流神の都を、

至高者の聖き住居を喜ばす。

5 神その中に在し給えば、



そは小揺さぎもしない。

晨あした近づけば神これを助け給う。

6 民らは騒さわぎ、国々は動いた。

神その声を出いだすや、地は崩れた。

7 万軍のヤーヴェーは我らと共にあり、

ヤコブの神は我らの高き巖いわおである。

8 来きたりて見よ！ ヤーヴェーの聖業みわざを。

彼は地に驚くべき事をなした。

9 彼は戦争たたかいを止めさせる、地の極はてに至るまで。

弓をうち砕くだき、槍やりをへし折り、

車くるま營まがこいを火で焼き棄て給う。

10 「汝ら鎮しずまれ！ しかし我の神たるを知れ！

我は国々に崇あがめられ、全地に崇められよう。」

11 万軍のヤーヴェーは我らと共にある、

ヤコブの神は我らの高き巖いわおである。

そういうように訳してみました。

●詩篇46篇の解説

この詩篇は歴史的背景がまず考えられる。私はこの詩篇の解説を書きましたから、一応その解説を読んで、それから自由なお話をさせていただきます。

「詩篇全150篇の中から10歌を選ぶとも、5歌を択とるともその中にこの詩篇を数えないではいられない。否、最後に残る一篇であるかもしれない。ルターが宗教改革の軍歌としてこの歌を謳うたいつつ真理の戦を進めた心を想う。万軍のヤーヴェーはルターにとつては同時にイエス・キリストであった。この雄篇から彼はいかにしばしば深い慰めと力とを与えられたことが。」

「さあ、フィリップ、また詩篇第46篇を謳おっじゃないか」

と信友メランヒトンをさそって合唱すれば、うなだれた魂は奮い起こされたのであった。それが彼自身この詩篇に拠よつて作詩作曲したあの有名な アイン フェステ ブルク イスト ウンザー ゴット „Ein feste Burg ist unser Gott.“ 「我らの神は堅き城なり」である。その他に我々が親しんでいる讚美歌「神はわが力、わが高き櫓やぐら」(讚美歌286) も正にこの詩篇に準じて詠うたわれたアイザック・ワッツの歌である。

どの詩篇も決定的に年代と作者を断定することができない。しかしどの詩篇もイスラエルという具体的民族の苦難の歴史の中から響き出でた声である。この詩が何か大きな歴史的事件の感動の中に作られたものであろうことは、全詩の現実的な迫力と第



1、第6、第8、第10の諸節から推測される。なお本詩の雄大な信仰内容とその雄大な表現は、本詩がイザヤ的な預言者魂の作であることを推測させる。

シムミットが言うように、祭礼用の詩の形態をそなえているではあるが、私は少なくとも原作をイザヤであると推定したいように思う。然りとすれば、歴史的事件とはかの紀元前701年のエルサレムの救いであると見る伝統的な説がやはり最も妥当であろう。

東方の猛鷲^{もうしゅう}アッシリヤが西方の巨鰐^{きやうく}エジプトと雌雄を争わんとした時、アッシリヤ王センナケリブの大軍がエルサレムを攻囲したが、預言者イザヤの神信頼とヒゼキヤ王の熱禱^{よみ}を嘉し給うたヤーヴェーは、アッシリヤの陣営に天軍を遣り、一夜にしてこれに殲滅^{せんめつ}的打撃を与え給うた(列王下18、19、イザヤ36、37参照)。かかる史的背景はこの詩に最も相応^{ふさわ}しい。その他アレクサンダー大王の猛威を振っていた紀元前4世紀の末か、それに続く継承者等の紛争時代を想像する説もあるがこれは採らない。

神なる実在者を外^{ほか}にして、我らが拠って立つべきものは何か。人間的自主独立を主張する者をして言わしめよ。それはニーチェ的超人、ディオニソス的人間像に極まるのみ。真の自主独立は、自己を絶対他者に投じた絶対他、主他^{しゅた}に在る。我らは人間として「なやみ」なきを得ない。しかしこのなやみをいかに感じ、いかに受けとるかが問題である。すべてのなやみは絶対面に於て受けとられない限り、真の意味も解決への道も与えられない。絶対面においては、自己を神の前に投じて神に面接するということである。そのとき、神は神らしき力と慰めとを必ず与え給う。その「助け」は本質的に人間の想いを越えたものである。我らにとり神は唯一^{ゆがいつ}の拠所^{よこ}また力である。

火山鳴動、暴風地震の如き天変地異に、大空襲、戦車来襲の如き大動乱裏に、なお怖れざる信仰は、我らの魂のどん底でこの実在者に、現実^{げんじつ}は接しているものでなければならぬ。この預言者の信仰は実に此^この如き突き抜けたものであった。この罪の世において、真になやむ魂は、それが極めて個人的なものであると同時に社会のなやみをなやむことであり、同時に民族や国家や世界のなやみを何らかの意味において背負うところのなやみである。これをなやみこれを負う立場は、実に世界内的な限界を突き破った全く終末的な信仰でなければならない。預言者イザヤの信仰は、正に此^この如きものであった。此の如く、世界苦を負い、世界苦に打ち勝つ信仰は、決定的に自己の碎かれたものであり、神に終末的に支えられている立場である。

アブラハム、モーセ、エリヤ、ホセヤ、イザヤ、エレミヤ、第二イザヤ、パウロ、ヨハネ、皆然らざるなし。実に旧約新約を貫いて終末的信仰こそ、イスラエルの現実と歴史とを支えて来たものであった。しかしてその決定的なものは実にイエスの十字架の死と霊生の復活であった。終末はイエスにおいて極点と支点とを現に有^もっているのである。



神の都の至高者の聖所と清流の神域 エゼキエルもかかる神境を礼拝の中心とした(エゼキエル書第47章参照)。しかしこの詩においては、エゼキエルに見る如き祭司的な現実性はない。ここでは世の動乱を足下に見下す神の聖都の厳かな姿が見られる。世の民はバビロンに集り、神の民はエルサレムを慕う。この作者が慕いし神の都は、最も美わしき終局的終末観においてヨハネに啓示されたところのものである(黙示録)。

詩篇第2に見るように、国々の動乱も、神の前には、おのずから崩れゆく空しき立ち騒ぎに過ぎない。人類とは何と無駄な謀略と擾乱を以て自らの墓穴を掘る者であるう。

一人の神の僕イザヤが当時最強のアッシリヤの前に神に信頼して立った。ヤーヴェーの聖手がこの信に応えて動いた。彼は双手をあげて叫んだ、

「来りて見よ！ 實在主の聖業を」

と。神の決定的勝利を預言者は信じた、神は必ずや戦争を廃棄せしめ給うことを。武器もすべて碎かれることを。

しかしそれはいつであろうか。

「汝ら勝手なことはやめよ。鎮まれ！ 碎かれよ！

しかしてわが神であることを知れ！」

かく呼びかけ給う神の言を、世界の人々が、真に心のどん底で聴く期である。人の耳ではない。各人の心腸がこれを聴くまでは、世は失われたものである。その信仰がかかる終末の時に面接している人が幾人あるか。その時を現実につかむ人々の信仰の戦いのみが二十世紀の危機を乗り越えしむるであろう。

今日全世界に知らしむべきは神のこの一言である。神を讃美する声が全地のはてより響ききたらんことを。その讃歌全天に響きのぼるときは、ベートーヴェンの『第九交響曲』もヘンデルの『メシア』も蚊の鳴き声に等しいであろう。

そういうわけで、だいたい根本的な基調をお聞きとりになったと思います。

●避所なるキリストはわがうちに

「神は我らの拠所また力、

あるいは、避所と言ってもいいですが、

なやみの時にあらわれる強き助けである。

と。「拠所」とか「避所」とかいふ。そのことはしばしば詩篇に出てきます。私たちはキリストを避け所とします。この「神」は私たちにとっては「キリスト」ですから。キリストという避け所にこちら側から行く。結構です。けれども、もうひとつある。それは私たちの中にキリストがある。避け所はわがうちにあったというわけです。

「どこへ避けようか、どこへ逃げようか」



ではなかった。わがうちにキリストという避け所がいらっしゃる。キリストという避け所をわがうちに見出すというと、ドカンと尻餅をついて、それでそこに力がある。だから、「抛り所また力」というのは、抛り所即力なんです。避け所即力なんです。逃げてそれでおしまいではない。そこに行くと、そこが力の源泉なんだ。これは原動力だ。原動力のあるところなんです、キリストという避け所は。

普通一般に

「丹田に、下腹に力を」

という。人間の普通の修養ではそういうことがある。けれども、キリストという魂の中心に自分がはたと気がつく、あわてることがなくなってしまうわけです。

「さあ、どこへ行くのか？」

なんてやったら、あわててしまう。ところが、

「どこへ行くかではない。そこでいいんだよ。お前のいるところがいい。そこに

私がいるではないか」

と。これが、

「キリストは我らの避け所。我らの避け所なるキリストはわがうちにいます」ということ。

なやみの時の強き助けである。

悩み、苦しみ、悲しみ、行き詰まり——いろいろなことがあります——その時の強き助けである。このうちなる世界。さつきはさんざん「一」と言いました。今度は「うち」。この「うち」の世界に入るわけです。

本当の世界はバカみたいな世界ですよ。皆さんはあまり利口すぎてこまる。だから、バカになってください。私みたいに単細胞にならなくては。私は大学の先生でも何でもない。ルターさんも、誰でもわかる「ムッターシュプラーへ」「お母さんの言葉」で語っていた。私はときに難しい言葉も言ったり書いたりしますよね。けれども、そんなものはいいんです、どうだって。大事なものは意味ではない。響きなんです。響きを受けとればいい。だから、私は号に

「天韻」

といている。天からの「韻」、響きだと。私の言ではありません、天の響きだと。天の響きをいかにもして伝えんとするのが私の悲願です。

そういう内なるところに——うろたえないです——うちなるところに避け所があるという。だから、救いはいずこよりきたるか。

そうすると、詩篇121篇になると、

「われ山にむかいて目をあぐ、わが扶助はいずこよりきたるや。²わがたすけは天地をつくりたまえるエホバよりきたる。」



なんて。まあそれもわるくはないさ。けれども、本当は山どころではない。超絶の世界です。超絶の絶対界に目をあげたらいい。超絶の絶対界は必ずもの凄い内在の世界になる。超在と内在が一つになっていなければダメなんです。

「いと高き処に住み給うところの聖者なる神は、いと低き処に降って、心砕けたる者、悩み悲しめる者の中に入って、これを活かす」

という。だから、超在と内在は一つ。一切を貫いてくるから、貫在している。どこにもあるから遍在している。

「超在、貫在、遍在、内在」

みなこれ一つです。もう相環関係です。「そのどれか」なんてやっているうちはダメです。もうね、楽しくてしょうがないですよ。キリストはそういう方ですから、

「宇宙的なキリスト」

ですから。宇宙的なキリストは私たちの一人ひとりの中に100%に入ってください。これが「避け所」です。いいですね。

●預言書の終末的な希望

²されば我らは怖れない、

たとえば天変地異が起ころうが、大変動が来ようが大丈夫だ。

「原子爆弾が、水素爆弾が爆発したって、私の肉体は飛び散ったって、どっこい本体は飛び散らんぞ」

と。本体はそんなもので負けるようなものではない。この霊の實在というものはそれだけのもの。私たちの信仰の内容がそれだけのもの凄さを持っていなければ、これからの現実には勝てないです。

それだけの祈りの世界に入ったら、自然に断食したくなるですよ。やってごらんさいよ、いっぺん、断食くらい。私は大した断食でもなかったけれども、ちよつとやりました。八溝山の深山幽谷で、滝の中に入ったらたちまち異言になってしまった。何もそんなことをやるのが何かではないけれども、自然にそんな気持になったら、やったらい。まあ青年諸君はいっぺんぐらいそういうところを経験したってわるくはない。

山々は海の最中に揺ぎ落つとも。

³その大水轟きて激らば激れ。

その漲りによりて、山々は震わば震え。

と。天変地異また人災、変動、何があっても、ということですよ。それはうろたえない。即ち、避け所をうちに持っているひと。キリストはいついかなる時にも、どこにおいても、来たり給うし、中に在り給う。

⁴河ありてその諸流神の都を、



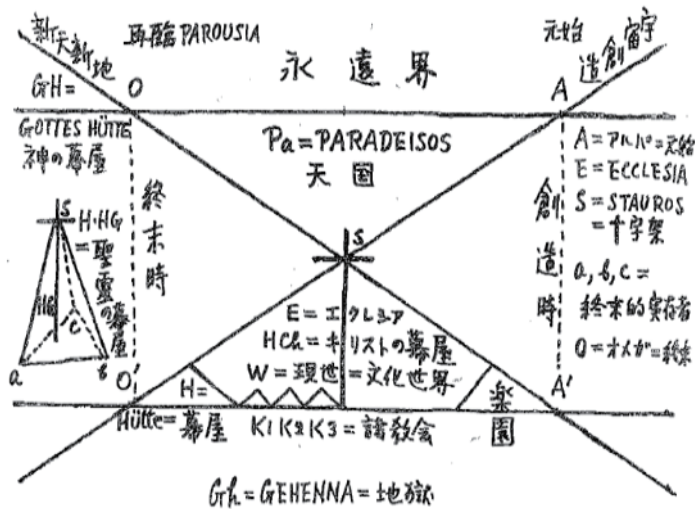
いとたかきもの
至高者の聖き住居を喜ばす。

という。これが終末的な、天界的な現実を同時に言っている。相對界がどんなに揺れ動くが、それに超絶したところの世界がある。それはもちろん旧約ではエルサレムがある意味において思われているけれども。でも、預言者は、もうそれを思いながら突き抜けている。天界のエルサレム、至高者の聖き住居、いと高きところのものですから。ただ山の上のエルサレムではない。

「河あり」という。旧約のこういった預言者が靈的に見せられたものはみんな黙示録のところでもヨハネが全部それを別な姿でもって見てしまっている。イザヤ書、エゼキエル書なんていうのは一番この黙示録に顕れているね。その他の預言者にもあるよ、ヨエル書、ミカ書5章あたりにもある。あなた方は旧約の預言書というのは時々読むといい。もう氣宇壮大になる。預言書は黙示録に通ずる世界ですから。預言書の終末的な希望をうたっているところは凄いいね。私は預言書に読みふけたときがある。

●神の歴史(幕屋)の図

私たちは地上においてはもう高がしれている。まあ生きて百年。もうあと八十年もしたら、みんな向こう側ですが。その時にやはり預言者たちの現実が私たちの前現実になるでしょう。そこは仮天国だからね。仮天国から今度は本当の終末の神の国に行く、それ待っているところが仮天国です。



『砂漠はサフランの如く』(曠愛新書第3号、1965年刊)の巻末に神の歴史(幕屋)の図を書いておいた。

これは悪の幕屋、この地上、この世の世界。この世の世界を支えているのがキリストの十字架。この全体が幕屋みたいな。この下はゲヘナ。ゲヘナは大きいんだ。この世は十字架の門を通って向こう側(パラダイス)へ行く。これが相似三角形、二等辺三角形で、本当にこれがただしければ、地上が全部、天国になるかもしれないが、そうはいかん。今、仮にこうしている。こうやって待っているわけだ、向こう側へみんなが行くのを。けれども、入っているのはこれくらいしかないかもしれない。とにかく、向こう側に最初にあの盗賊が入って行った。これがパラダ

イス。
十字架を通って行くひとたちは救われて、



「汝、今日、我と共にパラダイスにあり」

とキリストが言われた、パラダイスはここです。

ところが今度は、歴史は、時はこう進んでいる。そして終末の時がくる。「第二の死」ということが黙示録に書いてある。第二の死に入ると、これは本当の永遠の地獄になる。これは仮天国から今度はこっち側に本天国がある。新天新地の世界がくるということを、図式的に示したわけです。キリストの再臨によって、それから本当の天界が、神の国が開かれてくる。

まあこんな図を書いてみた。図というものはもちろん、あるひとつの暗号ですから。

●聖霊の河

4 河ありてその諸流神の都を、
至高者の聖き住居を喜ばす。

と。「河あり」ということはもちろん、生命の水、キリストが言われた聖霊が象徴されているところの生命の水。だから、

「聖霊、鳩のごとく」

というけれども、

「聖霊、滝のごとく」

という言葉もある。「天つ真清水流れきて」という讃美歌(217)もある。キリストがヨハネ伝4章でサマリヤの女に仰つていっているとおり。あれは大事なところだね。

その生命の水が天界にはあるわけです。その生命の水が私たちの中に聖霊として臨んでくる。だから、非常に我々クリスチャンにとって、この

「河ありてその諸流神の都を、至高者の聖き住居を喜ばしめる」

というような言葉は、これは聖霊の河ですから。我々にとっては、この聖霊の河、そこから生命の水をいただく。

「この水を飲む者は渴くことがない」

とキリストが言われた。

そのようなわけで、私たちにとつてはこれが非常に大事な句になってきている。イザヤはまだあこがれていたけれども、我々にはこれは現実なんです。天界の河から聖霊の流れが下りてくる。

そして、それは祈りの世界でそうですよ。皆さん、本当に御霊の水が天界からゴーツとおりてくるようなことを冥想しながら祈っていてごらんよ。ウワーツとくるから。ああ。それでもう本当に水を全身に浴びる。

黙示録の22章のところに出現しているでしょ。

「御使また水晶のごとく透徹れる生命の水の河を我に見せたり。この河は神



と羔羊こひつじとの御座みくらより出でて都の大路の真中を流る。河の左右に生命きの樹ありて十二種の実を結び、その実は月毎に生じ、その樹の葉は諸国の民いを医いすなり。」

と。

私も、私を通して一番先に神さまの力が働き給うたのはやはり、脊椎カリエスの方〔川口愛子〕でした。私は12時頃から小一時間祈った。そうしたら、もう大変なことになった。なにか毒気がでてきた。私は窓を開けた。そのうちにその人は――私は何も教えないのに――異言がほとばしりだして、異言が止まらない。それから適当なところで私は静めたけれども。

「もう先生、身心がすっかり軽くなりました」

と。脊椎カリエスが治ってしまった。そして、詳しく某先生〔塚本虎二〕に伝えたわけですから、そうしたら、

「何人にたぶらかされたか!？」

と、ガラテヤ書の言葉でもってその先生に攻撃された。

「そうですか、まあいいです。私はキリストに祈った。相手が何先生であろうと、そんなことは私には関係ない」

と、私は御霊の権威で言ったから、そのひとはやはりその先生の方が間違ったということ悟った。私はもういつペンしつかり――少しゆらいだからね――落ち着けるためにまた行って祈った。それから、その人はえらい働きをする人になった。

●祈り以上に聞かれている

そのように、キリストは、詩篇にもあるとおり、すべての不義、罪を贖い、すべての病を癒す。根源的にはみんな癒えているんです。それは多少びっこをおひきになっていたって、根源的には癒えている。聖霊の生命あるものは、正常に歩いている人よりも千里を先に行ってしまうですよ。現象面ではない。もうひとつ奥の根源現象の面においてキリストの生命を受けとっているひとは、たとえ寝ていても、カマボコみたいに病床にあっても普通の健康者よりも健康である。永遠の生命が来ているからです。神さまが自在にそれを現象せしめたもう。現象面はこたわることはない。根源の現実で、

「祈りたることは聞かれりとせよ」

とあるが、

「いや、祈り以上に聞かれているよ」

という。祈りが本ものなら。

ですから、この世はどんなに失敗したっていいですよ。ひとにどんなに嘲られ、どんなにけなされ、どんなに迫害され、どんなに失敗し、どんなにダメにみえても、どっこい神



さまは、

「お前は及第だ」

と。ところが、人の目にはいかにも及第しているようにみえても、

「どつこい、ちよつと待て!」

と、天国には入れない。神さまは、どういう人を天国に入れるかは、誰にもわからない。これは聖なる秘の世界、聖秘の世界です。

でありますので、相手は――人間の判断ではない――神さまとキリスト。キリストの救いは無条件だから、そこを本当に受けとつていけば、何も心配いらん。何のごまかしもいらん。そういうわけです。

絶望ということはないんです、我々クリスチャンには。パウロが言っているとおり、

「⁸われら四方より患難を受くれども窮^{きゆう}せず、⁹為^せん方つくれども希望^{のぞみ}を失わず、

⁹責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、¹⁰常にイエスの死を我らの身に負う。これイエスの生命^{いのち}の我らの身にあらわれん為なり。」(コリント後

4・8〜10)

と。こういうわけで、ハッキリとパウロはキリストの十字架と復活の生命のことをあの言葉で言っている。

⁵神その中に在^{いま}し給えば、

そは小揺^さぎもしない。

^{あした}晨^{あした}近づけば神これを助け給う。

「夕あり、朝あり、これ初めの日なり」

と言います。ユダヤ人はおもしろいよ。まず夕暮れから始まって、真夜中を通つて、朝に向かっている。毎日そうです。人生は、ある意味において、悩みの谷であり、暗夜、夜行である。けれども、朝に向かつて、永遠の朝に向かつて本当に義の太陽を、愛の太陽を迎えるわけです。

太陽といえど、どうして日本人は国旗を重んじないのかね。

「お前たちは日本人か!」

と言いたくなるよ。もう世界最高の国旗です。世界にいくつ国旗があつたつて、この日本の国旗にかなう国旗はない。なぜそのことを本当に日本人は自覚しないか。国旗を掲げるときに国旗を出している家がいったい何軒あるか。国旗を出すと軍国主義だと思う。そんなことではない。我らは自らが太陽となる。自らが太陽となることの象徴ではないですか。

「心に太陽を持て」

という。キリストという太陽をいただいたら、避け所にキリストという陽が、赤玉が、赫々^{かつかく}たる赤玉がある。私たちは、日本人というのはこのことだけを冥想しただけでも、もう福音の世界に入ってしまう。「国旗を見よ」と。



「汝、何を見るや」

「我は国旗を見る。そして、私自身は国旗である」

と。陽が入ってきたから、私たちのこの黒いところはみな真っ白くされてしまう。無色透明にされているじゃないですか。色が無い。もうこれは罪なき世界です。

「いつまでも、罪、罪、罪なんて言っているか」

と。全部それは神さまが、キリストが真っ白く無色にしてくださっている。国旗そのものだ。それが風にはためけば――風は聖霊だ――この国旗に付いているゴミなんかみんなとれてしまう。私は国旗が大好きなんだ。それから、もつと凄いのは昔の軍艦旗。光の線が出ていて賑やかでいいね（笑）。私は子どもだからね。いつまでたっても、私は子どもなんです。童心は失いたくない。

「おさない幼児のごとくならずば天国に入れない」

とキリストが言われた。

「汝ら、童心をいつまでも持っている」

と。いつまでも童心を持たなければ天国には入れない。大人ぶってしまったって、でき上がったような顔しているのは偽善者だよ、みんな。

●常に天国を歩いている現実

「神その中に在しいま給うから、そはさ小揺ぎもしない。あした晨近づけば神これを助け給う」

と。天界の晨が近づいて、常に私たちは永遠の朝に向かって動いている。暗夜には星が輝く。ヨーロッパに二人の偉大な詩人がある。ゲーテは太陽を非常に愛しました。

「自分は太陽の子だ」

と言っている。そして死ぬ時に、

「もつと光を！」

と言った。ところが、もう一人ゲーテに対するのがイタリヤにいる。ダンテです。今度の著作集第二巻『芸術のたましい』（1976年刊）に出てきますから。イタリヤの詩人ダンテは星。ゲーテは昼の詩人、ダンテは夜の詩人。夜の詩人とは冥想の世界だね。ゲーテというのを見る世界だ。ダンテは「地獄・煉獄・天国篇」の一番終わりの言葉はみんな「ステラ」「星」という字です。全部、「星」という字で終わっている。ゲーテさんは『ファウスト』の詩の初めに「太陽」で始まっている。

「太陽は昔ながらの調べを奏かなでて」

と。終わりは太陽で終わっているかと思ったら、ゲーテは太陽で終わっていなかったから、私は付け加えてやった。

「愛と歓喜をもつて



神聖なる太陽へ導く」

という言葉です。

「神聖なる太陽」

とは神さまのこと。そういう閃きがくる。だから、ゲテさんといえども、ちゃんと福音の世界でみると——まあゲテは

「一番言いたいことはよしておけ」

と言うから、彼はよしたのかもしれないけれども——見えてくる。

そういう、星の下をまた太陽に向かつて行く。夜も朝も昼も。宇宙的なキリストとなると、どういう状態、どういうところにおいても、みんなこれを活かしてしまうような生き方ができる。

「どうも今日は天気がわるくて」

だとかね——

「日日好日」

なんていう言葉があるじゃないですか——雨が降ろうが風が吹こうが嵐がこようが結構だと。外がどうであつても、

「雲の彼方には常に太陽は照っているよ」

という。いや実に雲を貫いて太陽は照っている。私たちの自分の主観的な気分だとか、身体の状態だとか、運命環境がどうであるとか、そういうことに支配されているうちはダメだ。それは絶対界でまだゴタゴタやつている。我々の現実、絶対界の中に入っている、そういう終末的な現実なんです。常にここにおいて天国を歩いている現実なんです。

「天国は汝らのうちにあり」

とは、

「絶対界は汝らのうちである。絶対界をお前たちは歩いているんだぞ」

ということですよ、永遠であると。死んでも死なないんです。みんな元氣が出たですか。

「でも、先生、くたびれています」

なんて。何を言っているか（笑）。そのくたびれている中から、くたびれざるものが湧いてくる。そうですよ。

●孤軍万軍

6 民らは騒ぎ、国々は動いた。

神その声を出だすや、地は崩れた。

まあとにかく昔から世界の歴史はみんなこのとおりだ。

「生者必滅、えしやじょうり会者定離」

という。



「驕る者久しからず」

「栄枯盛衰世の常ならず」

という。ちょうど、ああ晴れたと思つたら雲がきたり、雲がきたと思つたら雨が降ったり。同じことだよ、自然界のこの現象と人間界のこの現象は。それで何のかんのとやっているわけだ。そこをもうひとつ突き抜けなかったらつまらんですよ、信仰なんていったって。信仰とは本当の現実をつかむことである。

7 万軍のヤーヴェーは我らと共に、

「万軍のヤーヴェー」ばかりじゃないです。「ヤーヴェーとその万軍は」です。その万軍は我らと共にである。だから、私は

「孤軍万軍」

と言う。地上では孤軍的に奮闘している。ところが、天界に神さまの万軍がいる。天界に味方がある。パウロさん、ヨハネさん、ペテロさん、使徒たち、預言者たち。これは強力な味方です。聖書を相手にしていたら、もう問題ない。この預言者と使徒たちと語っていたら。これは天界からくるラブレターですからね。孤軍万軍で、ひとつもこわくない。この「孤」の中にキリストという驚くべき将軍が入っているから。白馬に乗っている。そういう幻を見た人があるんだよ、あるときに私の集会で。

「キリストが白馬に乗って、その後からずーっと万軍が従っている素晴らしい幻を見ました」

と。「よかつたね」なんて。黙示録の中に出てくる。

本当の孤は決して孤ではない。キリストほど孤独なひとはなかったです、キリストほど。弟子たちもみんな散ってしまった。

「今に、お前たちは羊飼いを去って、散り散りになる。お前たちも去るか」

とキリストは言っただけでしょ。ちゃんと先を見ている。

「お前たちも去るぞ。ペテロも私を三度否むぞ」

と。もう分かっている。聖霊がくるまではダメなんだから。キリストは全く孤独。

「わが神、わが神、なんぞ我を捨てたまいし」

と。神さまにまで捨てられたようなところが十字架です。これほど深刻な言葉があるですか。徹底的に神に従った。徹底的に汝の御意を現じたこのキリストが、「わが神、わが神、なんぞ我を捨てたまいし」と、この叫びは、天地をひっくり返す叫びです。

「神の義がなみせられてたまるか」

ということですよ。

「汝の御意を体现したこの私を、もしお捨てになるならば、あなたの義は通らないではないですか。あなたの義をどうしてくださるんですか」

ということが含まれているといつても差し支えない。ただ感情で言っているのではないで



す、キリストの孤独というのは。これは神の義を逆説的に叫んでいる。神の義を逆説的に――「組織神学」なんてものではないよ――完全なドラマチックなものです。

この「神の義」、それはルターがいくら苦しんだって、神の義を現象することができないから、ルターもぶつ倒れてしまった。それだけ真剣にルターもぶつかって、そしてキリストの義をいただいた。パウロと同じに。そうしたら、「我が義」は塵芥のごとくした。もううれしくてしょうがない。歓喜。もう罪なんかどこかへすつ飛んで行ってしまった。

そういう神の義。十字架は贖いであつた。だから、神さまは捨てたのではない。

「お前を活かす」

と。ゲッセマネの祈りというのは深刻ですね、血の涙です。それで、キリストは活かざるを得ない。甦らざるを得ない。「甦る」といったって、元の肉体に返つたのではない。もつと凄い霊体に返つた。だから、今もなお生きてありたもう。活けるキリストです。

●世界はだんだん善くはならない

6 民らは騒ぎ、国々は動いた。

神その声を出だすや、地は崩れた。

7 万軍のヤーヴェーは我らと共にあり、

ヤーヴェーと万軍は我らと共にある。こんな大なる味方があつて、何をか恐れんと。

ヤコブの神は我らの高き巖である。

8 来りて見よ！ ヤーヴェーの聖業を。

ここは歴史的事件が背景になっている。

彼は地に驚くべき事をなした。

一夜のうちにアッシリヤの大軍がみな仆れてしまった。疫病が何かにかかつて、囲みを解いてしまった。

9 彼は戦争を止めさせる、地の極に至るまで。

弓をうち砕き、槍をへし折り、

車営を火で焼き棄て給う。

敵の徹底的な殲滅的な敗北を見て、神さまの御業をそこに見て、そしてやがて神がきたらしめるところの平和の世界をここで預言しているけれども、それは簡単にはきません。人間が本当に神を信ずる事態がこの世界に及ぶまではこない。ところが、

「末の日に信を見んや」

と、世界はだんだん善くはならない。だんだん神の国にはならない。だんだん悪くなる。だんだん物質文明が盛んになればなるほど、いよいよ信仰は薄らいでいく。キリスト教界も聖霊が宿らないようなことであつたならば、これはもう同じこと。この世の子らの方がむしろ利口だから、負けてしまうよ。天の愚かさは、この世の賢さよりも素晴らしいんで



すから、この天の愚に入らなければダメです。けれども、イザヤ書2章、ミカ書4章あたりに出ている、最後の

「彼らはその剣を鋤に打かえその鎗を鎌に打かえん。国と国とは剣を挙げて相攻めずまた重ねて戦争を習わじ」(ミカ4・3)

というこの世界の預言は、またイザヤ書の

「⁷牝牛と熊とはくいものと同じにし熊の子と牛の子とともにふし獅はうしのごとく藁をくらい、⁸乳児は毒蛇のほらにたわむれ乳ばなれの児は手をまむしの穴にいれん」(イザヤ11・7・8)

「毒蛇の穴に手をつ突つ込んでも咬まれない。獅子は肉食をしないで藁を食う」

なんて——ルーベンスが描いているけれども、あんなことをなぜ書いたのかと思う——本当に凄いね、預言者というのは。そういう本当の天国的な楽園を見ているから、預言者は書かされている。想像して書いているのではない。

ダメだね、日本人は、しつかりしないと。まあ第一流の坊さんたちはかなり近いけれども、まだ。そういうためには、神との関係が本当に立つ平安にこななければ、世界に平和はきません。

●静動一如

第10節、

10 「汝ら鎮まれ！^{しず} しかして我の神たるを知れ！

と。この一言です。それで私は「静動一如」なんて書いた。静動ということをもし地理的に考えると、静は東洋、動は西洋。これは世界です。西洋人は、欧米の人は動的なんだ。ゲーテなんても、

「行為また行為、初めに行為ありき」

なんていう。動く。とにかく活動的で、文化や文明を推進する力を持っている。向こうは動的なんだ。東洋はどうかというと、あぐらをかいている。静かなんだ。だいたい、こちらの芸術は静かだね。

「静まりてあれ」

とここにもちゃんと書いてある、

「汝ら静まれ」

と。「静まれ」とは何ですか。「祈り」の世界です。祈りの世界で深く沈黙の世界に入って、祈りと冥想の世界に入る。静まれと。心を落ち着けるといったって、この祈りの世界に入らなければダメです。

祈りの世界で、祈りは上からくるものを受けとる世界です。と同時に、祈りはまた上に帰入する世界です。上から来る方が先ですよ、臨んでくる。そして、上に帰り入る。こういう静かな深い祈りの世界。静かな深い祈りの世界にも、凄い動が入ってくるんです。こ



の動は、しかしながら、そう軽挙妄動はしない。軽はずみに妄りに動かない。あの出エジプトのところもそうでしょ。出エジプト記14章で、

「¹⁴エホバ汝等のために戦いたまわん。汝等は静まりて居るべし」(出エジプト 14・14)

「お前たちは静まって、今日、神さまのすることを見なさい」

とモーセが言った。向こうからエジプトの軍勢が押し寄せてくる。前は紅海で海だ。もう進退きわまる。みんな海に溺れざるをえない。それなのに、モーセは

「静まりて、今日、神さまのなすことを見ている」

と、手を挙げると、海が分かれた。イザヤ書30章15節にもある。

「静まりてあれば神からの力をえる」

と。あれはルターの好きな言葉です。

「¹⁵主エホバ、イスラエルの聖者かくいたまえり、なんじら立ちかえりて静かにせば救をえ、おだやか平穩にして依り頼まば力をうべしと。」(イザヤ30・15)

はいこの通り。静まりて静かにしていれば救いがやってくる。穏やかにして依り頼めば力がやってくる。力は動的なものを持つている。だから、静かなる世界に動の力が入ってくる、動力が。静動一如と言ったのはそのことなんです。

「立つて待つ者もまた神に仕えているんだ」

というようにことをミルトンも言っている。何か仕事をしたからそれでいいというのではない。仕事をするもしないも、問題は本当に神さまを受けとつて、静かなる時は静かにやっていよいよ力を得る。そして一朝ことあれば動に転ずることができる。もし、この静まりの世界を持たなければ、この動は出てこない。

火山は静かに煙を吐いている。時あつてか爆発するよ。内側に火がある。火山のように。

日本は火山国だから。静かに煙を吐いている火山が一番いいね。いつ爆発するかわからないからこわいなんて。こわいんじゃないよ。そういうような力を持つているような山。日本は本来、火山国だから。浅間山とか阿蘇山とか。

皆さん、普段静かに力を貯えなさい、キリストの力を祈りの世界で毎日。毎日の祈りの静かな夜でも朝でも、そうすれば必ず力がくる。仕事をするもしないも、御意のままですから。もう必然的にやむにやまれずして動く時は動きます。しかし、それは怠けて静かにしているのではない。上からの動力源をいただくための静けさですから。

「よし、それでは私はもう静かにしていよう。何もしない」

なんて(笑)。それでは動く時に何も動けないよ。

「汝ら静まりて、我の神たるを知れ。お前たちを通して何をするか、静かに私に依り頼んでいろ。そして、受けるものはほとんどん受けていけ」

と。



我は国々に崇められ、全地に崇められよう。」

11万軍のヤーヴェーは我らと共にある、

ヤコブの神は我らの高き巖である。

キリストもいつも人知れず静かに山に行つて神さまに祈つた。キリストの言もまたあの行為もみなその静けさのうちに受けとっている。神さまとの深い交わりの中で。

「ワツシヨイ、ワツシヨイ」

と祈ることばかりが祈りではないですよ。そういう祈りもいいさ、あるときは。けれども、祈りは、皆さんは家で祈る時に声をあげて祈ってますか。そうじゃないでしょ。しかし、その静かな祈りの中で、それは時間がある時は長いし、ある時は短い。まあ本当に一時間くらい祈ることもあるよ、キリストの中に沈潜するからね。またそういうのも楽しいです、本当に沈潜する。そうするともう何ともいえない。ルターは非常に仕事をしましたが、今でいうと二時間くらい祈つたらしい。

「よく祈ることは半分仕事をしたことである」

なんて言っているから。いわゆる冥想三昧を言っているわけではないですよ。

●カントの「善意志」

詩篇46篇は、どんな天変地異も人災も、どんなに揺れ動いても、私たちはこのキリストを、うちなるキリストをいただいている。そしてここに本当の避け所を持って、そこで力を得る。しかも、それは本当に静かなる、静まりて祈っているところの世界でもつていよいよキリストが中に入ってください。電車の中でもどこでも、目をつぶれば直ちに祈りの世界に入れる。何といつても、そういう意味において、祈りをぬきにしたらば、我々の信仰生活なんてのは空しい。実質を伴わなくなってくる。

聖書は、この文字の奥を喰らつて進んでいく。そして、これが本当の生命となる。だから、聖書を読むことが同時に静かに祈ることでもあります。そこに本当の力が来ることであります。そういった深い落ち着きのある人となる。そして、それが自在にこの動に変ずる。静中の動、動中の静という、静動一如ということ。どんなに動いていても、そこに静けさを持っている。どんなに静かであっても、そこにももの凄い動を宿している。キリストの御霊の世界では、これが常に自分のものとなつていきます。そうすると、

「われ一切の秘訣を得たり」

と、パウロと一緒に言えるようになる。どういう境涯でも、もうそれに対して自在に対処することができる。また弱き人には弱き人となる。どういうものに遭つても、その中に溶け込んでいつて、それを溶かして荷ないあげて、また変化させていく。まあしようがない人間になる。千変万化、行く処をしてかなわざるなしと。しかも、その本質は一如の世界を持つている。これはキリストという――もうキリストなんていうものは説明できない――



―これは生活において体験し、体现し、何を読み何を聞き、どういうことをしようが、全部これがキリスト中心に溶かされていく。

静動一如、信行一如。これは誤解しては困るよ、この信行も。

「私は行為できません」

なんて。そうじゃないですよ。信ずるとは、ぶっ倒れて、

「何ももうどうにもならん」

といって、

「主さまー！」

といって叫んでいると、そこに入ってくる。キリストの信が入ってきます、キリストの信が。キリストの信は同時に行を持っている信であります。私たちの行為なんかどんなに破れていたって、そんなことは心配いりません。いいですか。

カントは道徳哲学で、

「善意志は、絶対無条件にこの世においても、この世の外においても、善意志の他に善なるものはない」

と言った。『道徳哲学原論』の最初の素晴らしい言葉です。この善意志は、たとえば行為しようと思っても、生まれつきその人はなかなか善き行為ができない。それであっても、

「その善意志をもって一生懸命にやろうとしているその姿は、いい加減な気持ちでいわゆる善き行為をしているものよりも、はるかにこれの方が道徳的である」

と、カントは言いました。カントの道徳は、そのような本当の意志の奥の、その姿を見ていて、さすがにやはりルターのプロテスタント信仰の、福音の信仰の質をその道徳哲学の中に持っている。私はあの文章を読んだ時に涙がにじんできた。私みたいな意志薄弱なもの、三日坊主ですぐダメになったりする。その善き心があれば、躓いても転んでもまたなくてもいい。そこに本当の姿を見えるという。けれども、生まれつきなかなか意志力が強くて、行動力があつて、善きことができる人、その方が評価される。けれども、

「それよりもその善き意志の方がはるかに尊い。これは宝玉の如くである」

とカントは言いました。

私たちにとっては、信仰の世界の、このキリストから賜っているところの、自分に絶しているところの、十字架によつて贖われて

「はいっ」

と言っている世界です。「はい」ですよ。「はい」と言つて受けとつたところに輝くものが、芥子種一粒の信なんです。これが爆発力を持っている。これはキリストのもの。ありがたいです、賜りたる信です。親鸞の歎異抄とそっくり。私は歎異抄を読むと、これも涙が出るね、親鸞の信仰は。こちら側に何も期待することのない世界にももの凄いものがやってくる。皆さん、自分なんか問題にしないでいいですよ、ひとつも。そのように行きましょう。お



わります。

●祈り

あわれみ深き主さま。昨日と今日と、なにか長い長い月日を送ったような気がします。また、瞬間であつたような気もいたします。しかし、あなたがこの破れ器の僕を通し、ただ御言、御霊が臨み、聴くも語るも同じこと、あなたから承り、あなたの聖霊を受けとり、一人びとりが本当に天国的な本当の現実に入れさせられ、本当の霊気を吸い、本当の食べ物を、御言という食べ物をくらい、そして

「われ生く、されどもはや我にあらず、汝生き給う」

と。主さま、あなたが私たちの腸はらわたの中で生きてくださっているから、ここを避け所とし、ここを原動力とし、静中の動、動中の静、自在の生命の世界に入れてくださって、感謝であります。行き詰まりをしりません。何がどうなつてもいいです。あなたが必ず私たちの思いにすぐることをなしてくださるから、そのことを本当に何が起きてもどうなつても、最善が備えられてあることを信じぬいて、また望みぬき、耐えぬき、また愛しぬいて参ります。

そのようにして私たちはこのイエス・キリストを身をもって証せずんば、空の空なるかなすべて空なり。本当に神さま、：(異言)：、主イエス・キリストさま、南無キリストと呼んで、その中に入り奉り、兄弟姉妹たち、みな一人びとりがまるで歓喜の歌のごとくであります。私たちの中にくすぶっているものはいません。みな本当の喜びをうちにもつ。喜びの音信とは、私たち自身が喜びの音信になることです。

現実の奥の世界に、雨が降ろうが風が吹こうが曇ろうが、実に私たちは成層圏を飛ぶジェット機のごとく、神さま、私たちは常に太陽を本当にまともに見ながら、主イエス・キリストと共に進んで行きます。私たち自身が日本の国旗であります。活ける国旗として進んで行きます。「光は東方より」というが、

「汝らは世の光なり、世界の光なり」

と、どうぞ、私たちをそのような光にいいよ育ててください。

これを求める者、尋ねる者、行き詰まっている者に、いかにもしてこのことを知らせずんばあらず、本当に伝えずんばあらず。そのようにして、このマルチン・ルターの宗教改革記念は、単なる記念ではなくして、第二宗教改革への第一歩をまた新しく踏み出したことを感謝いたします。

今、心から感謝と讃美と祈りと、兄弟姉妹たちのそれと共に聖名により捧げ奉る。アーメン。

